

# 映画「遺言～原発さえなければ」を観て

小野さとえ

1月18日（日）入間市産業文化センターにて記録映画「遺言～原発さえなければ」を観てきました。「地球環境に学ぶ」サークルの定例会で紹介され数人で出かけました。

この映画は2011年3月11日の翌日、現場に駆けつけた二人のフォトジャーナリスト（豊田直巳氏・野田雅也氏）が、その日から2013年4月まで800日にわたり記録しつづけた映画です。

飯舘村の酪農家11家族を中心にその生活が記録されています。奇しくもこの飯舘村は理想的な循環型の農村でとても豊かな生活が営まれていた、と震災後すぐに開催されたところざわ倶楽部のフードマイレージ講演会で聞いたものでした。まず最初に映し出された村役場の屋根いっばいに設置されたままの太陽光発電パネルが目に入りました。

見た目は何も変わらない風景、でも誰も住むことが出来なくなってしまった村、今ではそこは小鳥やとんぼも来なくなり静寂だけがありました。

しかし第一原子力発電所からは30キロも離れており当初は放射能の拡散状態が分からず、知らされることもなく、避難して来た人達も居たほどです。

なんということでしょうか！

結局酪農家11家族は家も仕事も手放さざるを得ない状態のまま年月だけが過ぎてしまっています。耐え切れずに命まで失ってしまった方々、何とか生活を立て直そうと踏ん張っている方々、そしてその時間が長くなればなるほど皆、年をとってしまいます。酪農を大学で勉強しその後スイスまで学びに行った若者も村を離れるしかなかったのです。大切に大切に増やしていった牛を手放さざるを得なかった酪農家の悲しみは計り知れません。

トラックに乗せられる時の牛たちの悲しそうな眼も脳裏に焼きつきました。

それぞれのこれまで積み上げてきた生活もスキルも関係なくバラバラに避難するしかないのです。その苦しみはいかばかりでしょう。本当に大変な思いが伝わり胸が苦しくなります。



—長年仲間として一緒に生活していた牛たちとの別れ—

あの日からもう少しで4年目がやってきます。私達の中では少しずつ遠い出来事になってしまっているかも知れません。問題も時間の経過とともに複雑化し分かりにくくなっているように思えます。しかし、だからこそ目を離さずしっかり受けとめ原発のない地球を、安心して住める地球を求めて行きたいと切に思わせてくれた映画でした。皆さんも機会がありましたら、ぜひ観てください。